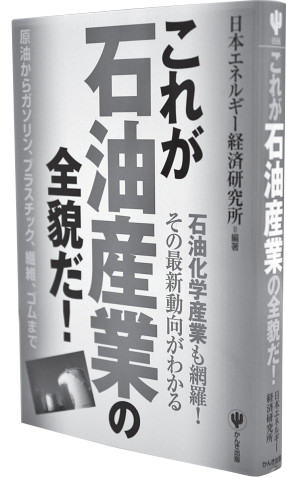


日本エネルギー経済研究所 編著
石田 博之 (社会情報学部教授) ほか 著

『これが石油産業の全貌だ!』

かんき出版 2009年4月刊 1,680円

〔評者〕小川 芳 樹



「石油」と言われて現在も日本のエネルギー供給の半分近くを占める重要な資源だと直ちに意識できる人はどれほどいるであろうか。一昔前の石油危機の時代であれば「石油」をもっと身近に感じていたと思うが、「いまだに半分近くもある!」「えっ?」と言うのが正直な感想であろう。しかし、実際には「石油」が日本の経済・社会を支える重要な役割を現在も果たしているのである。

そういえば、2008年に石油価格が1バレル150ドル近くへ大暴騰し、その後は未曾有の世界大不況で30ドル近くまで大暴落したと思いつく人もいるであろう。重要資源の石油価格はどうしてこんなに乱高下したり高止まりするの? 誰もが感じる素朴な疑問である。

21世紀に入って石油価格が高騰したのは石油資源がなくなるからだと聞いたけどそれは本当なの? 中国がなりふりかまわず世界中から石油を集めていると聞いたけど問題はないの? 石油は自動車の燃料で代役がなかないのと聞いたけど電気自動車はどうなの? 次々と湧き起こる疑問は絶えることがない。

一般の人々の意識が必ずしも高くない重要資源「石油」とそれを支える石油産業を巡るこのような数々の疑問に万遍なく答えることができる良書が出版された。それがこの一文で紹介する『これが石油産業の全貌だ!』とタイトルされた本書である。

本書は5章を使って50の大項目を整理しており、各大項目がさらに3〜7の小項目に分

けられている。総計254の小項目の内容がわかりやすい図表とともに詳しく解説されている。まさに、「石油産業の全貌」と称するにふさわしい項目・内容をカバーしているといえる。

上述の疑問には、「原油価格を決定する2つの取引」、「原油市場へ流入する巨額マネーの動向」、「原油埋蔵量は何年分あるか」、「中国とインドは石油資源の獲得を進める」、「運輸部門は省エネをどう進めているのか」と言った大項目が答えを出してくれているであろう。

本書の大きな特徴として特に指摘したい点は、石油産業の下流に位置する石油化学産業に關しても最新動向を網羅している点である。「石油」という重要資源のノーブルユースを長期的に考える場合に、石油化学産業における原料としての用途は決して外すことができぬ分野といえるが、本書でそれを見落とさず取り上げていることは実に慧眼といえる。

本書の難点を1つ挙げるとすれば、同じく石油のノーブルユースにおける長期的な指定席と考えられた輸送用燃料の分野が電気自動車の技術革新によって大きな揺らぎを生じている最近の動向が必ずしも十分に語られていないことである。とはいっても、一般の人々に強く意識されない重要資源「石油」とそれを支える石油産業をこれほど網羅的に解説した良書は数少ない。

この機会に是非本書をご一読いただき、わが国および世界における「石油」の重要性を再認識いただけると幸いである。

(東洋大学経済学部総合政策学科教授)